The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四一年一二月-一九四二年四月 「開戦」と文学 : <連続/切断>の問題
Author(s)	平, 浩一
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼1941年12月

・1日、御前会議、対米英蘭開戦決定。

・8日、日本軍、英領マレー半島上陸、米領ハワイ真珠湾空襲。米英に宣戦の詔書。

・10日、大本営政府連絡会議、戦争の名称を「大東亜戦争」に決定。日本軍、マレー沖海戦、英軍戦艦撃沈。米領グアム島占領、米領フィリピン北部上陸。

・11日、日独伊三国協定調印。独・伊、対米宣戦布告。

・25日、日本軍、英領香港占領。

▼1942年1月

・2日、日本軍、米領フィリピン首都マニラ占領。

・18日、日独伊軍事協定調印。

・23日、日本軍、ビスマルク諸島ラバウル占領。

▼2月

・15日、日本軍、英領シンガポール占領、華僑虐殺事件。

一九四一年一二月―一九四二年四月
「開戦」と文学――〈連続／切断〉の問題／平　浩一

一九四一（昭和一六）年一二月一〇日、大本営政府連絡会議において、「今次戦争ノ呼称並ニ平戦時ノ分界時期ニ関スル件」が、それぞれ「大東亜戦争ト呼称ス」、「平時、戦時ノ分界時期ハ昭和十六年十二月八日午前一時三十分トス」、とされた（閣議決定は一二日）。ここに、大本営によって「平時／戦時」の「分界時期」が明示されたのである。

真珠湾攻撃ならびに対米英戦開戦の日（付）である「一二月八日」は、その後、小田切進が綿密に調査したように（「十二月八日の記録」「文学」一九六一・一二、「続・十二月八日の記録」「文学」一九六二・四）、雑誌媒体でいえば、一九四二年新年号の記事の差し替えからはじまって、四月号まで、集中的に言及されていく。本特集の「一九四一年一二月―四二年四月」という担当時期を記述するにあたって、やはり「開戦」、「一二月八日」をめぐる言説を見逃すことはできないだろう。

たとえば、河上徹太郎は「文學界」を舞台に、「開戦以来非常にすが〳〵しい気持」（「後記」新年号）、「私は今本当に心からカラツとした気持でゐられるのが嬉しくて仕様がない」（「光栄ある日――文藝時評」同）、「戦争が始つて誰でも非常にカラツとしたと言つてゐる」、「全くカラツとして実に芯が強くなつて、壮大な言葉が出て来てゐる」（「即戦体制下文学者の心」同人座談会」四月号）などと繰り返している。

こうした「開戦」や「一二月八日」をめぐる言説について、曾根博義は「そのほとんどは申合せたかのように、暗雲が一挙に晴れてからっとした気持になると同時に、身体の底から闘志が燃えて来た、という類のもの」と包括している（「戦前・戦中の文学」『昭和文学全集　別巻』一九九〇・九、小学館）。このような傾向は小説にも見られ、たとえば、上林暁「歴史の日」（「新潮」二月号）でも、「なんだかカラツとした気分で、誰彼なしにお饒舌りがしたくてならな」いと、登場人物の「私」が「一二月八日」を語っている。

▼3月
・1日、日本軍、蘭領東インドのジャワ島上陸。5日、首都バタビア占領。
・8日、日本軍、英領ビルマ首都ラングーン占領。
▼4月
・18日、米軍機16機、日本本土初空襲。

【社会】
▼1941年12月
・19日、言論出版集会結社等臨時取締法公布、21日施行。
▼1942年1月
・2日、閣議、毎月8日を大詔奉戴日に決定。
▼2月
・1日、味噌・醤油の切符配給制、衣類の点数切符制実施。
▼3月
・6日、九軍神の発表。
▼4月
・30日、第21回総選挙（翼賛選挙）。

こうした言説が流通した背景を知る上で、津島美知子の以下の述懐は見逃せない。

長女が生まれた昭和十六年（一九四一）の十二月八日に太平洋戦争が始まった。その朝、真珠湾奇襲のニュースを聞いて大多数の国民は、昭和のはじめから中国で一向はっきりしない○○事件とか○○事変というのが続いていて、じりじりする思いだったのが、これでカラリとした、解決への道がついた、と無知というか無邪気というか、そしてまたじつに気の短い愚かしい感想を抱いたのではないだろうか。その点では太宰も大衆の中の一人であったように思う。この日の感懐を「天の岩戸開く」と表現した文壇の大家がいた。そして皆その名文句に感心していたのである。（『回想の太宰治』一九七八・五、人文書院）

このような証言からも、「申合せたかのよう」な言説が流通した背景が見えてくる。一方で、平野謙は「一二月八日」について、また異なった指摘をしている。

十二月八日で日本の現実がガラッと変つたといふことは、それは明かな事実だと思ふけれど、日本全体の姿が変つたほど人間の心といふのは変り難いし、変らないのぢやないかと思ひますね。十二月八日といふのを、一つの区切りにしてそこに意味をもたせてすぐ書くといふことはどうですかね。（「対談　文藝時評」「文藝」一九四二・三）

ここで平野は、「一二月八日」という日（付）を小説化することに疑問を呈しているが、図らずも「一二月八日」を主題とした小説は、平野が指摘したような傾向を内包したものが多かった。すなわち、先の上林暁「歴史の日」にせよ、広津和郎「號外」（「日本評論」新年号）にせよ、あるいは太宰治「十二月八日」（「婦人公論」二月号）にせよ、「十二月八日で日本の現実がガラッと変つた」ことが語られながらも、同時に、それでも「変らない」「変り難い」日常生活が続き、その両者が混ざり合っていく戸惑いが描かれている。たとえば、太宰治「十二月八日」でいえば、「昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送つたか、ちよつと書いて置きませう」、「聖霊の息吹きを受けて、

【文化】

▼1941年12月

・24日、文学者愛国大会開催。

▼1942年1月

・10日、大日本映画製作株式会社（大映）設立。

▼2月

・2日、大日本婦人会発会式。

・5日、日本新聞会設立。

・6日、社団法人映画配給社（映配）設立、4月1日より業務開始。

・11日、日本少国民文化協会発足。

・18日、三木清、清水幾太郎、中島健蔵ら陸軍報道班員として徴用、南方へ。

▼3月

・19日、日本画家報国会結成。

・21日、日本出版文化協会、4月より全出版物の発行承認制実施を決定。

【代表作】

▼1941年12月

・堀辰雄「曠野」（「改造」）

つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがふ日本になつたのだ」という〈切断〉＝「区切り」＝「分界」が冒頭で強調されながらも、夫はいつも通り仕事をし、夕食をとり、銭湯へ出かける。そんな夫に対して、妻は「どこまで本気なのか」と戸惑い「呆れ」ながら、小説は終結していくのである。

太宰治の場合、この「十二月八日」という作品を残したために、あるいは「新潮」新年号発表の作品「新郎」末尾に、「昭和十六年十二月八日之を記せり。この朝、英米と戦端ひらくの報を聞けり。」という「区切り」をわざわざ記していることなどから、「戦時下」との関連を指摘する際、一九四一年一二月八日以降に焦点が当てられる場合が多い。しかし、「十五年間」（「文化展望」一九四六・四）の存在やその記述などをもとに、太宰は「満州事変」（あるいは「第一次山東出兵」）からを、「戦時期」として〈連続〉した形で捉えていたと見ることもできる（荻久保泰幸「戦争」『太宰治事典』一九九四・五、學燈社）。さらに、連合国軍、GHQ/SCAPによる占領期（あるいはサンフランシスコ講和条約まで）も「戦時期」に含めるならば、太宰治はその職業作家活動を、常に「戦争」とともに過ごしたと位置づけることもできよう（もちろん、彼の作風・活動は、時期ごとに劇的に変化しており、単線的な〈連続性〉のなかでとらえることにも、慎重であらねばならないが）。

今日に至るまで、この「戦争」の呼称は様々に分かれている。特に、その呼称によって、戦争・侵略がどの時期（地域）を指すかという問題は大きい。たとえば、「アジア太平洋戦争」という同一の呼称でも、使用者や文脈によって、一九三一年、一九三七年、一九四一年という、様々な始点を指す形で用いられている。ここには、「戦争とは何か」、あるいは、「戦争でない時期とは何か」、という根源的な問いがある。

再び一九四一年一二月の文学をめぐる動向に注目すると、一二日「日本編輯者協会」発足、一三日「新聞事業令」公布、一七日「言論出版集会結社等臨時取締法」国会通過、二一日施行、二四日「文学者愛国大会」開催などが続き、「ほぼ完全な言論統制の体制がしか

・太宰治「旅信」（「新潮」）
・太宰治「誰」（「知性」）
▼1942年1月
・太宰治「新郎」（「新潮」）
・火野葦平「朝」（「新潮」）
・広津和郎「號外」（「日本評論」）
・正宗白鳥「根無し草」（「日本評論」～8月）
・太宰治「恥」（「婦人画報」）
・芹沢光治良「巴里に死す」（「婦人公論」～12月）
・太宰治『駈込み訴へ』（月曜荘高梨一男私版）
▼2月
・上林暁「歴史の日」（「新潮」）
・太宰治「十二月八日」（「婦人公論」）
・石塚友二「松風」（「文學界」）
・中島敦「古譚」（「文學界」）
・太宰治「律子と貞子」（「若草」）
▼3月
・上田廣「冬の町」（「改造」）
▼4月
・太宰治『風の便り』（利根書房）

れ」ていったとされる（小田切進「十二月八日の記録」前出）。当然、これらは「一二月八日」による〈切断〉＝「区切り」＝「分界」を背景にしている。そして、一九四二年五月に「日本文学報国会」が結成されるのである。しかし同時に、同会は、「開戦」以前の四〇年「大政翼賛会」成立と岸田國士の文化部長着任、「日本文学者会」、「日本文芸中央会」をめぐる動向、菊池寛を中心とした「文芸家協会」、「小説家協会」、「劇作家協会」発足にまで、もちろんのことながら、その命脈はさかのぼる（都築久義「日本文学報国会への道――戦時下の文学運動」「愛知淑徳大学論集」一九八八・二等参照）。

荻久保泰幸は「十五年戦争と文学――十二月八日という日づけ」（「國學院雑誌」一九六八・一〇）で、太宰治「十二月八日」を、上林暁「外的世界と内的風景」や高見順「文学非力説」の「提言を、ひそかに実践した」小説だと位置づけている。上林・高見両論によって勃発した「素材派・芸術派論争」（一九三九年）、「文学非力説論争」（一九四一年）は、ともに「開戦」を前にした、国策（文学）をめぐる「曖昧」で「漠然」とした論争だったと片付けられることが多い。しかし、「十二月八日」における「嘘だけは書かないやうに気を附ける」と、小説（＝フィクション）のなかで書き付ける太宰治の姿勢は、やはり非常に特異なものであり、その〈連続性〉に注目した荻久保の指摘にもある程度首肯できる。

こうした多面にわたる問題を踏まえると、〈平時／戦時〉〈協力／抵抗〉〈前線／銃後〉〈素材派／芸術派〉〈文学非力／国策文学〉等々、「戦争」をめぐる様々な二項対立の評価軸が提示され、それ自体が問題視されるなかで、「一二月八日」をめぐる言説は、「分界時期」と〈連続／切断〉の問題として、あらためて重要な意味を帯び立ち現れてくる。

冒頭で触れた、一九四一年一二月一〇日大本営政府連絡会議の「今次戦争ノ呼称並ニ平戦時ノ分界時期ニ関スル件」自体が、「平時、戦時ノ分界時期ハ昭和十六年十二月八日午前一時三十分トス」としながらも、同時に「今次ノ対米英戦争及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルヘキ戦争ハ支那事変ヲモ含メ大東亜戦争ト呼称ス」、としていたのである。